

特集**日本で暮らす外国人とその家族の
雇用・教育・ケア・食の問題**

日本政府はあくまで「労働力」として外国人労働者を受け入れるスタンスをとっていますが、国境を越えて日本にやってくるのは多様な生活習慣や価値観、経済的背景を伴った「人間」です。本特集では、外国人労働者やその家族が日本に住まう中で抱える労働や日常生活上の問題とその問題の解決に向けた支援について、雇用・教育・ケア・食の分野を中心に上げていきました。

特集1では、農業分野の技能実習生らが抱える困難が、債務奴隷化、過重労働、健康被害、言語障壁、廃棄労働という視点から描き出されます。

特集2では、コープさっぽろで進む外国人材の受け入れにおいて、外国人材に対する日常生活や言語教育面でのサポート、外国人材を受け入れる店舗や工場責任者へのサポート体制について紹介がされています。

特集3では、在日コリアン一世の高齢者のために在日コリアン二世が立ち上がり始めた介護保険事業を契機として、多様な文化的ルーツを持つ人々のケアに関わる支援を行っているNPO法人エルファの取り組みを紹介しています。

特集4では、外国ルーツの子どもたちへの学習支援活動や居場所づくりについて、IKUNO・多文化ふらっと、Minamiこども教室の2事例を紹介しています。

外国ルーツの子どもにとって、母語が通じること、信頼できる人がいることや安心できる場があることが、いかに大切なかが示されます。

そして、特集につづく「くらしと協同を訪ねて」では、来日が増えつつあるムスリムの人たちに、安心して日本の食文化であるだしに親しんでもらおうと、ハラル認証を取得したかね七株式会社を取り上げています。

特集の中には、「日本でそんなことが起こっているはずがない」と読者が目を背けたくなる記述もあるかもしれませんが。しかし、私たちが享受している便利で安全で安心できる消費生活は、既にたくさん外国人労働者の支えによって成り立っています。にもかかわらず彼らやその家族は、日本社会の最も脆弱な層の一人として、格差や貧困、労働環境、ケアや教育機会の喪失といった困難に直面しがちです。

もちろん本特集では、外国ルーツの人たちと共に新しい道を探っていこうとする取り組みも紹介しています。これらを特別な事例として扱うのではなく、普遍的なものに変えていくためには、読者の一人一人に、外国ルーツの人たちが抱えている問題が自らの生活と密接に繋がっていると捉えてもらうことが必要です。

(本研究所研究員 小田巻友子)